聖　書：マタイ 8：5〜13
説教題：百人隊長の信仰
日　時：2018 年 12 月 9 日（朝拝）

今日の箇所には一人の百人隊長が登場します。その彼がイエス様のみもとに来て懇願します。この後、見て行くと分かりますように、彼は異邦人でした。その彼が言い表した信仰にイエス様は驚かれます。イスラエルの内にこれほどの信仰を見たことがない！と。そして異邦人の彼が称賛され、神の国のメンバーとなることが言われて行きます。そういう意味でこの箇所は、同じく異邦人である私たちにとって大いに関係がある箇所です。直接的に自分たちに向けて語られているメッセージとして、この御言葉に聞いて行きたいと思います。

さてこの百人隊長はイエス様のみもとに来て、自分のしもべのために願います。百人隊長とはその名前の通り、100 人の兵士たちを統率し、訓練する隊長のことです。彼は部下が 100 人もいるから一人くらいは…とは考えず、その一人のためにイエス様に願い出ました。「しもべ」と訳されている言葉には印が付いていて欄外に別訳が示されている通り、「子」という意味の言葉です。彼はしもべを単なる一つの道具としてではなく、「子」として慈しみ、大事にしていたようです。そのしもべが中風のために家で寝込んでいました。「中風」という言葉にも印が付いていて、欄外を見ると「からだが麻痺した状態」とあります。すなわち半身不随の状態で、ひどく苦しんでいました。そこでイエス様は 7 節で「行って彼を治そう」と言われます。その時、百人隊長は 8〜9 節の言葉を語ります。それを聞いてイエス様は百人隊長の信仰に驚き、賞賛されます。彼の言葉のどこにそんなに賞賛すべき点があったのでしょうか。三つの点に目を留めたいと思います。

まず一つ目は 8 節最初の「主よ、あなた様を私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません」という言葉です。ここに見るのは彼のへりくだりです。彼はどういう意味で自分には資格がないと言ったのでしょうか。一つ考えられることは、自分は異邦人だからユダヤ人の先生の前では資格はないという意味です。当時ユダヤ人は異邦人を汚れた者たちと見下していました。そんな異邦人の家にユダヤ人の先生をお招きすることはユダヤ人からしたらとんでもないことである。ですから私には資格がありません。そういう儀式的な意味・儀礼的な意味であったと取るのは一つの理解の仕方です。しかし

実際に彼が考えていたことは、それ以上のことであったと思われます。この後見るように、彼はイエス様が持っている非常に大きな権威を見ていました。その偉大なお方の前では自分はあまりにも小さな者でしかない。あまりにちっぽけな者に過ぎない。自分の家に来ていただくことなどお願いできる者ではない。そのように自分の小ささ、卑小さ、貧しさをわきまえた者として、彼はイエス様にこのように述べたのだと思います。

これは神に近づく態度として重要なことです。マタイ 5 章 3 節：「心の貧しい者は幸いです。」　ヤコブ書 4 章 6 節：「神は高ぶる者に敵対し、へりくだった者には恵みを与える。」　自らの小ささ、卑しさをわきまえてへりくだることは、神の恵みを豊かに受けるための条件です。

しかしです。イエス様に自分の家に来ていただかなくて、どうやってしもべを癒していただくことができるのでしょうか。二つ目に注目すべき点は、彼が「ただ、おことばを下さい。そうすれば私のしもべは癒やされます。」と述べたことです。これは確かに驚くべき信仰の言葉です。これまでイエス様がそのように離れた場所から、ただお言葉を発して誰かを癒したという例はありません。皆イエス様のみそばに人々を連れて来て癒していただきました。ところがこの百人隊長は、イエス様に来ていただかなくても大丈夫であると言いました。ただお言葉をいただければ！と。どういうことでしょう。その理由が 9 節にあります。それはいかにも軍人らしい視点からの信仰告白です。百人隊長は、自分は権威の下にあると言っています。具体的には、この地方を治めていたヘロデ・アンティパスという王に仕える百人隊長だったと考えられます。そしてそのヘロデ王はローマ皇帝に許されて、この地を治めていた王でした。そういう意味でローマの支配を確立するための地方の王でした。百人隊長はそのヘロデの下で、さらにはローマの下で、権威を与えられていました。その彼の言葉は下の者に対しては絶対的な力を持っています。しもべに「行け」と言えば行くし、「来い」と言えば来る。また「これをせよ」と言えば、そうする。一言発すれば、すべてその通りになります。それは彼が上から権威を着せられているからです。彼はこの視点に立って、イエス様は私とは比較にならない、とてつもなく大きな権威を上から着せられている方だと見ました。すなわち全能の神からの権威を着せられている方であると。どうして彼はそのように見えることができたのでしょうか。それは彼がこれまでのイエス様の様々なみわざについてのニュースを聞いたからでしょう。多くの人を癒し、様々な病気を治されたこと、またこの世の教師たちとは次元の異なる権威を持った教え。ルカの福音書の並行記事によると、この

百人隊長はユダヤの宗教に対して深い関心と理解を持っていた人のようです。彼についてユダヤ人の長老たちは「この人は私たちの国民を愛し、私たちのために自ら会堂を建ててくれた人です」とイエス様に推薦しています。彼はこの地に駐屯し、ユダヤ人と関わる内に、イスラエルの宗教について深い関心を持つようになり、求道するような人になっていたことが伺えます。そんな中、彼は軍人らしい視点から、イエス様というお方は神から特別の権威を授けられてここに立っておられるということを見た。そしてこの方において自分たちが未だ見たことのない神の支配、神による新しい統治が始まっていることを見たのです。そして三つ目に注目すべきは、このイエス様において始まっている新しい神の統治はあわれみと恵みに満ちた統治であると見たことです。彼は自分は資格のない者だと言いつつ、だからと言って私はこの恵みにあずかれないとまでは言っていません。自分は全く資格がない者だけれども、このイエス様に乞い求めれば、このような私でもあわれみに満ちた神の恵みの支配、恵みの世界に生かしていただける。そのことが許されている。そのように信じたから彼はイエス様のみもとに来て懇願したのです。

イエス様はこの彼の言葉を聞いて驚かれ、ついて来た人たち、群衆に向かってこう言われました。10 節：「まことに、あなたがたに言います。わたしはイスラエルのうちのだれにも、これほどの信仰を見たことがありません。」　本来イスラエル人の内にこそ、このような信仰告白がまず見られるべきだったとイエス様は言います。なぜならイスラエル人は神の言葉にずっと養われて来た民だったからです。しかしそんな彼らから未だ聞くことができなかった信仰の告白をイエス様は異邦人の百人隊長から聞きました。それはイエス様にとって大いに驚きでした。イエス様は 11 節のように言われます。「あなたがたに言いますが、多くの人が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます。」　ここで言う「東からも西からも来る多くの人」とは異邦人を指します。やがて世界中の異邦人が天国に入り、アブラハム、イサク、ヤコブと同じ食卓に着く。旧約聖書以来、天の御国は祝宴にたとえられて来ました。イザヤ書 25 章 6〜9 節：「万軍の主は、この山の上で万民のために、脂の多い肉の宴会、良いぶどう酒の宴会、髄の多い脂身とよくこされたぶどう酒の宴会を開かれる。この山の上で、万民の上をおおうベールを、万国の上にかぶさる覆いを取り除き、永久に死を呑み込まれる。神である主は、すべての顔から涙をぬぐい取り、全地の上からご自分の民の恥辱を取り除かれる。主がそう語られたのだ。その日、人は言う。『見よ。この方こそ、待ち望んでいた私たちの神。私たちを救ってくださる。この方こそ、私たちが待ち

望んでいた主。その御救いを楽しみ喜ぼう。』」　その救われる異邦人の先駆けを、イエス様はこの百人隊長の信仰に見たのです。一方のユダヤ人についてはこう言われました。12 節：「しかし、御国の子らは外の暗闇に放り出されます。そこで泣いて歯ぎしりするのです。」　ここの「御国の子ら」とは、神の民としての恩恵を受けて、当然天国に入るだろうと思われたイスラエル人、新約時代のユダヤ人のことです。彼らが反対に外の暗やみに放り出される。そしてそこで泣いて歯ぎしりする。このマタイの福音書はユダヤ人に向けて書かれた福音書ですが、彼らにとっては衝撃的な言葉です。しかしイエス様はここにはっきりとある真理を示しています。それは天の御国に入るのは人種や国籍によるのではないということ。ユダヤ人として生まれたから自動的にそこに入るのではない。そこに入るのはただ信仰による。その信仰によらなければユダヤ人であっても外に追い出される。これは外面的特権に安んじようとするユダヤ人にとっては警告の言葉である一方、全世界のすべての異邦人に対するイエス様の招きの言葉です。どんな人も、この天の御国の祝宴に入ることができるし、またそのように入る者となりなさい！という招きです。

最後にイエス様は 13 節では百人隊長に向かって言われました。「行きなさい。あなたの信じたとおりになるように。」　すると、「ちょうどそのとき、そのしもべは癒やされた」とあります。距離的に離れているのに、またイエス様はそのしもべと会ってさえもいないのに、ただお言葉によって、そのことを行われた。まさに百人隊長が告白した通り、とてつもなく大きな権威を持っている方が、その権威ある言葉を発することを通して行なわれた驚くべき御業でありました。

以上の箇所から私たちは自分にどのように当てはめるべきでしょうか。まとめとして二つのことを述べたいと思います。一つは私たちは百人隊長がイエス様を見つめたような目をもってイエス様を見ているだろうかということです。百人隊長はイエス様がとてつもなく大きな権威を、上からすなわち神から着せられていることを見ていました。従ってその方がお言葉を発するなら、すべてはそのようになると信じていました。またその方がもたらしている新しい統治は恵みとあわれみに満ちたものであることを見ていました。今日の私たちと比べて、彼がイエス様について知ることができたことはほんのわずかであったと思います。それにもかかわらず、よくもこのような目を持つことができたなあと驚きます。しかしそのことは逆に私たちを責めるものでもあります。きっと百人隊長は私たちを見て言うのではないでしょうか。あなたがたは今やこんなに豊かな

神の啓示を受けながら、どうしてイエス様の本当の姿を認められないでいるのか。あなたがたは何を見ているのかと。私たちは聖書全体を通して、はるかに良くイエス様のことを知ることができる位置に置かれています。イエス様は天の御国が近づいたと言って宣教の歩みを開始されました。そして神の新しい統治が始まったことを示す様々なみわざを行われました。そして罪ある私たちをこの恵みの支配に生かすために、私たちの代わりに十字架上で尊い命を捨て、3 日目に復活されました。そして天に昇る前に、マタイの福音書28 章18 節でこう宣言されました。「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。」　またエペソ人への手紙 1 章 20〜21 節にこうあります。「この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世だけでなく、次に来る世においても、となえられるすべての名の上に置かれました。」　これらの啓示をより豊かに受ける恵みにあずかっている私たちは、今日の箇所の百人隊長以上に、イエス様が持っている力強い権威について告白できなければならない。この方がお言葉を発されれば、すべてはそのようになる。そのような偉大な権威を持っているお方である。私たちはイエス様をそのような方として仰いでいるでしょうか。それともこれだけの材料を与えられていながら、そのことが良く見えていない者でしょうか。目がかすんではっきり見えていないなら、どうかこの目を開いて、それが見える者とさせてくださいと祈るべきではないでしょうか。鈍い心の眼が開かれて、喜びをもって百人隊長と同じ告白ができる者としてください！と願うべきではないでしょうか。

もう一つのことは、もしそのことを見ているなら、私たちのすることは百人隊長のように主に助けを求めて祈ることです。私たちの直面する一つ一つの課題について主のあわれみと恵みを求め、よりすがることです。主イエス様が偉大な権威を持っていると見つめていても、その方に祈るのでなければ何にもなりません。イエス様は「あなたの信じたとおりになるように」と言われました。信仰を通して恵みを受けるというのが聖書が示す原則です。信じて実際に祈り求めなければ私たちは受けません。祈ることを通して受けるのです。反対からこのように言うこともできます。具体的な日々の祈りに現れて来ないようであれば、その人は本当にイエス様の権威を仰いでいるとは言えない。イエス様の権威を見上げている人は必ず喜びながら祈るという姿を示すのです。

ある人は「信じたとおりになるように」と言われていても、私たちが願う通りには必

ずしもならないのではないかと言うかもしれません。確かに何でも祈れば必ずそうなるということはありません。それでは祈りは魔術、マジックになってしまいます。他の箇所から、神は私たちの祈りを聞いて、良いものだけをくださる、取捨選択して本当に私たちにとって最善のものだけを与えてくださると私たちは教えられています。しかしだからと言って、このことは私たちの祈りはあまり重要ではない、祈らなくても良いということにはなりません。あのパウロも肉体のとげを取り去ってくださいと具体的に何度も主に祈りました。そのプロセスを通して、実は主の最善の御心が違うところにあると示されました。私たちが主に祈って、主が最善のことをもって私たちの祈りに答えてくださることは、私たちにとって慰めです。

しかしこのことは私たちの祈りをやめさせるものではありません。私たちは今日のイエス様の最後のことば、「あなたの信じたとおりになるように！」という言葉を自分自身の心の中に響かせるべきです。私たちにとっての励ましは、異邦人がこのように主に求めても良い！ということです。これまで神と特別な関係にはなかったような私でもOK。御前に何の資格も持っていないような私でもOK。その者も、この偉大な権威を持ちたもう主に祈る恵みに招かれています。

イエス様は天地一切を治める偉大な権威を持っている方として、今日も私たちに「あなたの信じたとおりになるように」と言っておられます。私たちは、私たちの一つ一つの課題、問題、悩み、心配、恐れていることについて主に祈り願い、この主の大きな権威のもとで解決と救いをいただきたいと思います。そうしてただ恵みによって、やがて天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブとともに食卓に着く、御国の民の一員とされる幸いな道を歩む者でありたいと思います。